

今日の焦点

ますます重要になってきた情報セキュリティ対策

インターネットの普及により、ウイルス感染、フィッシング詐欺、クリック詐欺などインターネットを舞台とした犯罪はますます増加しており、しかもその内容は多様化・悪質化している。今後は無差別かつ広域にネットワーク機能そのものにダメージを与え、社会・経済活動が大規模に麻痺する可能性が増えることも指摘されており、情報セキュリティ対策への取組みが極めて重要になってきている。

まず、コンピュータウイルスであるが、世界で初めて出現したといわれる1986年から22年、わが国の届出件数は、情報処理推進機構（略称IPA）の調査では、2005年には約54,127件に達した。その後2006年からは減少に転じ、2006年は44,840件、2007年は34,334件となっている。このようにウイルス届出件数は減少傾向にあるが、ウイルスが沈静化しつつあるというわけではない。数年前まではウイルスは世界的な感染被害をもたらし、作成者の技術力を誇示する「愉快犯」がほとんどであったが、最近では特定の企業や地域を狙って金銭などをだまし取ろうとする「犯罪営利目的犯」が増えており、特定の個人から組織的な犯罪に移っている。

特に最近では、企業や団体が運営する正規のWebサイトにアクセスすることによって自動的にウイルスに感染するケースが増えている。今年はこのタイプのウイルスが急増すると見られており、ウイルス感染の8～9割は電子メ

ールではなくWebサイト経由になるのではないかとされている。また、最近では「シーケンシャル攻撃」といって、次々と亜種を送りつけ、ウイルス対策の目をかいくぐろうとする手法が増え、侵入に成功すると、Webサイトから別の亜種をダウンロードして複合感染を引き起こし、復旧に手間取っている間に別のコンピュータに感染し続ける。こうなると、その対策も従来の画一的な対応ではなく、様々な技術を組み合わせ、複合的なソリューションが必要になってくる。

新型のウイルス「スパイウェア」は、クレジットカード番号やパスワードなど個人情報の詐取を目的としており、また「ボット」は、進入したパソコンを外部から操り、所有者の知らないうちに迷惑メールの送信や企業サイトへの攻撃をするウイルスで、名称の語源は「ロボット」である。単に所有者の個人情報が盗まれるだけでなく、知らないうちに犯罪に利用されてしまうという危険なウイルスである。総務省・経済産業省連携プロジェクトのサイバークリーンセンターでは、ボット駆除ツールの配布などボット対策を進めており、相当の効果をあげているが、新種が次々と出現しており、完全駆除は難しい状況である。

実在する企業や団体をまねたサイトに誘導し、IDやパスワードなど個人情報を盗もうとするフィッシング詐欺も増加している。これで奪ったパスワードなどを使って他人になりすまし、金

銭を奪ったり、ネットオークションで詐欺を働くなどによって、被害者は増えており、なかには被害総額が1億円を超えるケースもでてきている。対策としては、怪しいWebサイトを閲覧しないことであるが、最近ではWebサイトの身元を確認する電子認証も広がっている。

Webサイトにクリックしただけで契約が成立したとして料金を不正請求される「クリック詐欺」も増えている。昨年10月には、IPAに届けられたクリック不正請求を巡るトラブル相談件数が、過去最高の369件となった。専門家は「怪しいサイトでは安易にクリックせず、料金を請求されても応じないで欲しい」と注意を喚起している。

利用者の意図に反してメール広告などを一方的に送りつけるスパム（迷惑）メールも猛威をふるっている。世界の電子メールの8割以上はスパムメールが占めているという分析もあり、通信回線などのインフラに大きな負担を与えている。Winnyなどのファイル共有ソフトを利用中にウイルス感染、情報流出につながるトラブルも後を絶たない。

以上のように、インターネットに対する攻撃は、今後も絶え間なく続けられることは間違いない。その対策としては、法的な規制も重要であるが、個人も企業も情報セキュリティの重要性を十分に認識し、あらゆる方法を駆使して、常に細心の注意を払っていくことが必要である。